

令和 3 年度 第 1 回 静岡県文化政策審議会 会議録

日 時	令和 3 年 7 月 6 日（火）13 時 30 分から 15 時 30 分まで		
場 所	静岡県庁別館 9 階特別第一会議室		
出席者 職・氏名	会 長 横山 俊夫 （静岡県文化芸術大学学長） 副会長 太下 義之 （同志社大学経済学部経済学科教授） 委 員 北川フラム （アートディレクター）※Web 出席 木下 直之 （静岡県立美術館館長） 澤田 澄子 （公益社団法人企業メセナ協議会常務理事兼事務局長）※Web 出席 柴田 英杞 （独立行政法人日本芸術文化振興会プログラムディレクター）※Web 出席 鈴木壽美子 （静岡県文化協会会長） 遠山 敦子 （静岡県富士山世界遺産センター館長） 仲道 郁代 （ピアニスト）※Web 出席 松井 冬子 （日本画家）※Web 出席 宮城 聰 （公益財団法人静岡県舞台芸術センター芸術総監督）※Web 出席 森谷 明子 （日本画家） 静岡県 スポーツ・文化観光部部長代理 京極 仁志 スポーツ・文化観光部理事（文化担当） 渋谷 浩史 ” （文化プログラム担当） 落合 徹 ” 文化局長 紅野 聖二 （事務局） ” 文化政策課長 室伏 学		
議 題	下記のとおり		
配付資料	別添資料のとおり		

1 議 題

- ・ 第 5 期ふじのくに文化振興基本計画の中間案に関する審議

2 審議内容

別紙のとおり

(別紙)

1 結果概要

議題について、資料に基づき事務局から報告、委員から多様な意見が出された。

2 部長挨拶

次期文化振興基本計画については、文化政策審議会ではこれまで2回にわたって様々なご提言をいただき、それを基に中間案を作成した。この計画は、今後の文化政策の方向性を決める重要な計画であり、より良いものとするためにも、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 議事

- 横山会長 議事に先立ち、今回初めてのご出席となる仲道委員から一言いただきたい。
- 仲道委員 静岡県は私のふるさとであり、県が文化芸術をどのように人々の生活の中に関わらせていくのかということについて考えていることを心強く思っている。私の思うことがお役に立てたら幸いである。
- 横山会長 初めに第5期の文化振興基本計画の中間案の説明と、本日の審議における論点について、事務局から説明願いたい。
- 事務局 初めに第5期計画の策定スケジュールについて説明する。第5期計画については、これまでに令和2年11月と令和3年3月。そして、今回の3回目の審議となる。この後は10月と年明けの2月頃の計2回、計画策定に向けてご審議いただきたいと考えている。

次に、第5期計画の中間案の目次で計画の構成案をご確認いただきたい。今回は第1章から第3章と、第4章の概略までを中間案として提示している。

第1章「文化振興基本計画とは」では、本県の文化振興基本計画についての説明である。(1)(2)の通り、本計画は静岡県文化振興基本条例に根拠を持つ計画であり、また静岡県の総合計画の分野別計画でもある。さらに、国の法令に基づく地方公共団体における文化芸術推進基本計画、障害者文化芸術活動推進法で新たに努力義務とされた地方公共団体における障害者文化芸術活動推進計画を兼ねたものになると考えている。

2 ページの(3)、計画期間は現在の計画と同様で4年間としている。

続いて3 ページの3「静岡県の姿」は現在作成中だが、静岡県らしい計画や施策づくりを念頭に、静岡県の歴史的・文化的背景などを盛り込んだ記載を考えている。

続いて4 ページの第2章「文化を取り巻く状況」からは、社会情勢の変化や国の法改正など、現在の文化を取り巻く状況について触れている。

11 ページのSDGsに関しては、現在、次期計画の策定を進めている県の総合計画でも、SDGsを意識したものになると思われるため、方向性を総合計画とそろえた形とする予定である。

12 ページは新型コロナウイルス感染症による危機と対応について記載しており、本県のコロナ対応については、この後の16 ページから18 ページで別にまとめている。

13 ページからは、近年の国の政策の動きをまとめている。第4期計画期間中には、障害者文化芸術活動推進法の制定や、文化財保護法の一部改正などがあり、この計画策定においても、これらを意識したものとなる。

15 ページからは、「静岡県の現状と課題」である。現在の第4期計画では、「感性豊かな地域社会の形成」という目標に向けて、「文化を享受し創造し、支える人を育てると共に、文化活動を行う環境や仕組みを整えます」と基本目標に記し、これまで施策展開を行ってきており、表に第4期の主な成果をまとめている。

なお、資料編の1 ページから3 ページに第4期ふじのくに文化振興基本計画における指標一覧をまとめている。新型コロナウイルス感染症の影響により、施設の来館者数など、令和2年度の指標での評価ができないものもあるが、取組状況から評価した。

戻って中間案の15 ページでは、第4期計画期間中のトピックを記載している。文化プログラムの実施とそれを生かしたアーツカウンシルしずおかの設置。続いて、SPACを中核とした「演劇の都」構想などを掲げている。また、新型コロナウイルス感染症への本県の文化面での対応を16 ページから17、18 ページに記載した。

19 ページでは、これまでの内容を踏まえて課題を整理している。関係機関へのヒアリングや審議会における委員の皆様の発言などを含めて最終的には整理していくが、現時点ではこの5項目に課題は概ね集約されると考えている。これを踏まえて、県として推進すべき施策の方向性、第5期計画の基本目標を定めていく。

22 ページの基本目標案については、これまでの審議会でのご意見などを踏まえて、事務局でも協議を重ね、基本目標案を「生活の中に多彩な文化があふれ、誰もが表現者になるしずおかの風土づくり」、サブタイトルに「若者が感性豊かに育ち、皆が文化に親しむ心の健康長寿日本一を目指して」とした。

「生活の中に多彩な文化があふれ」は、美術館での鑑賞や SPAC での観劇など、県民が楽しむ文化芸術だけでなく、元来生活の中にある文化も含めて、県民の生活の中に多彩な文化があふれる姿を表現した言葉である。

「誰もが表現者」については、インターネット環境の進化もあり、誰でも表現することができる時代となったことや、地域の芸術祭で、アーティストの力を借りて地域住民がその地域の文化資源を発信するなど、表現の仕方も多様化したことから、県民が文化を身近なものと感じ、一人ひとりが表現者として主体的に文化にかかわる様を目標とした言葉である。

そういった生活の中に多彩な文化があふれ、誰もが表現者になる県として、誰もがそれを当たり前を感じる風土となるまでを目標として、風土づくりとしている。

「若者が感性豊かに育ち、皆が文化に親しむ心の健康長寿日本一」については、県として子どもたちが文化芸術に触れる機会を拡充して若者が主体的に育っていく様子と、誰もが文化に親しみ末永く心豊かに活動できる様子を、本県が健康長寿県であることと照応させる形で、心の健康長寿日本一と表したものである。若者と高齢者だけを対象とするものではなく、老いも若きも含めた皆が文化に親しむ結果の「心の健康長寿日本一」という言葉としている。

続いて、20、21 ページの施策の方向性と、それを受けての 25 ページからの施策展開についてである。

施策展開については、今回は概要のみの提示としている。重点施策 1 から 5 については、これまで示してきた五つの柱である。表の中にはまず施策目標、施策内容、評価指標をまとめている。

27 ページには重点施策 1 を例とした作成イメージを付けている。その他の重点施策についても同様の形で、現状と課題、重点施策を進める上での考え方、あとは評価指標と施策内容をより細かくかみ砕いた形を検討している。

これらを踏まえ、今回の議題について説明する。第 4 期計画で基本目標に掲げる文化活動を行う環境や仕組みの整備に一定の道筋が立ったことから、第 5 期計画では新たな基本目標を設定することとして、計画の中間案を提示している。本日は二つの論点を設定した。論点 1 は中間案の 22 ページに記載した第 5 期計画の基本目標案に関する審議をお願いしたい。論点 2 では、第 4 章重点施策に記載すべき内容について、委員の皆様の専門的見地からの発言をお願いしたい。

限られた時間の中ではあるが、委員の文化活動や経験に基づく忌憚のない発言をお願いしたい。

○横山会長 第4期から第5期にかけて、これまでの審議会での様々な意見を丁寧に拾っての編集と言える。当初想定していなかった新型コロナウイルス感染症の蔓延により、人間や自然についての考え、社会の中での人の動きや働き方についての見方も大きく変わりだした。今は、次の第5期についての議論をするには視野がやや落ち着きだしたところかと思う。

まず最初に論点1についてご意見を求めたい。欠席の高山委員からコメントが届いている。それも参考にされたい。

○木下委員 「多彩な文化」とあるが、なぜここに多彩という言葉を選んだのか。それがあふれるという、最初の前段の部分がやや弱くないか。何を受けて誰もが表現者になるのかと考えると、多彩な文化がある、よりも、多種多様な文化を認め合う社会があって、それを前提に誰もが表現者になり得る静岡の風土づくりという展開の方がいいと思った。

「心の健康長寿日本一」では、何が日本一を目指すのかがよく分からない。健康長寿が医者にかからないことだとすれば、それは心がけの問題なのかというあたりが曖昧である。私なりに言い換えると、「若者が感性豊かに育ち、皆が文化に親しむ」は、生涯を通して文化に親しむことができる静岡を作っていくことかと思う。

また、前段では「誰もが」で、後段は「皆が」と言い換えられているが、皆という言葉はここではふさわしくないと思う。

一番重要な今期の目標は「誰もが表現者」ということかと思うので、これをきちんと位置付ける論理構成を目指すべきである。

考え方について、生活の中に多彩な文化があふれというのは、先ほども触れたが、もっと多様な文化を認め合うというように能動的に他動詞にした方がいい。昔の日本家屋で床の間に掛け軸を掛け、という例は、あまり適切ではないと思う。身近なところに文化があったということだが、されは今でも姿を変えながら存在しており、床の間と掛け軸の話を持ち出すのはどうだろうか。一方で、祭りは、地域の総合的な文化イベントであり、地域の資源がそこで結集されるイベントなので、例としては適切だと思う。

暮らしの中の多様な文化をどう説明するのかというあたりも気になっている。

○横山会長 文化が様々で、時には互いに相容れないような違いもあり、それをなんとか認め合えるようになるということが今世界ので大きな課題なってきた。祭りについても、人間と人間以外の存在に向けての祈りや、すべてのエネルギーが結集されるとい

う意味で、重要な指摘である。

○鈴木委員 「誰もが表現者」という言葉がなかなか難しく、皆さんがどう受け取るかということが少し心配ではある。文化プログラムの中でも例えば大井川の無人駅とか、富士の山ビエンナーレ、それから笹間の陶芸フェスティバルとか、山の中の小さな村の人たち全体がボランティアであるとともに、完全に主になって、アーティストと近所の住民が一緒になって企画を盛り上げている。手料理を作ったり、宿泊を受け入れたり、海外や県外からの方をもてなしたりとか、そういう意味で「地域とアートが共鳴する」という言葉が具現化されていてとてもうれしく思っている。また、先日の SPAC 忠臣蔵やリーディングカフェなど、SPAC の活動は県民を巻き込んで皆が一緒に楽しめる。鑑賞するとか観劇するではなくて、自分もできるというそういう意味での誰もが表現者という言葉になると思うので、私も皆さんにこの言葉を理解していただき、定着してほしい。

○横山会長 「誰もが」には人間以外も入っているだろうか、お面を付けている人は人間と言えるかどうか、そんなことも思いながら聞いた。表現者というのはどちらかと言えば近代のスローガンであり、誰もがと付いたのが最近だと思う。そして、先ほど言ったように、コロナウイルスの蔓延があって、新しい文化のあり方を求めるステージに入ろうとしている時点であるということにも留意したい。

○北川委員 この計画案では、いろいろなことを取り出して説明しているが、何が言いたいのかが分からないまま堂々巡りをしている感じを受けた。何がしたいのかに触れていなくて、例えば誰もがとか、享受するとか、創造するとか、そういう何か自分たちが言ったことについて解釈をしている。やることなく文章を作っているというように感じた。

つまり、世の中で言われている文化に関係している言葉をいろいろ出して、その解釈をしているというのがこの計画であり、相当まずいのではないか。

○横山会長 行政の立場としては、なかなか難しいところもあるのだろう。計画を広げて語り直すという文脈もあるが、繰り返しになることもあり、何をしていくかということへのつながりが出にくくなっている。

○北川委員 SPAC は頑張っていて、新しくアーツカウンシルを作って、そこでいろいろな

ことをやっていくという以外の中身が見えてこない。コロナへの対応も、具体的に何も触れられていない。コロナ禍が収束すればいいが、いろいろ起きることに対しての準備が根底から考えられておらず、こういうことがあるから大変であると言っているだけで、この間いろいろなところで頑張ってきたコロナに対する対応というのがこの中に入っていない感じがして、リアリティがないように感じる。

○横山会長 確かに、エールアートプロジェクトとかいろいろ救済策を講じられたが、中身は書いていないので、分かる人にしか分からない記述に止まっている。

○森谷委員 誰もが表現者に関連して、SPACは、コロナ禍においてずいぶんな活躍と言うか、地域で定着した印象がある。例えば朗読みたいなものをオンラインでやってもらう。それも県民のリクエストに応じて、一人ひとりが応えてやってもらえるということ。それから、先ほどお話があった、県民が主人公になっていく忠臣蔵は、出演した人が大変喜んでいて。また、私がボランティア協会と一緒に東日本大震災後3年目に作った被災地の本を、SPACの俳優が毎年朗読してくれている。そういう草の根的なことがすごく肌で感じられる。ピアノのまち浜松が浜松市民に定着しているのと比べると、SPACはなぜ演劇なのか？からのスタートだとは思いますが、コロナ禍において人々の期待に応じて、生活の中に入ってきたと思う。SPACの俳優一人ひとりの自主的な細やかな活動が、誰もがというところに近づいてきて、自分たちが作ったシナリオを読んでもらったり、一人劇団をやってもらったり、こういうことがこの先もどんどん膨らんでいけばいいと思う。

また、SPACはこの夏も中学生・高校生に向けた演劇の勉強会を行っていて、そういうところから地道に育ててもらって、子どもたちが自分たちの学校に持ち帰って文化祭を華やかにしていくと、誰もが表現者になるという静岡県に近づいていくと、希望的に感じている。

○宮城委員 中高生鑑賞事業において、子どもたちを引率する先生たちは忙しいせい、演劇を見ていないように見受けられる。先生たちにまず演劇のワークショップを受けていただき、先生自らが表現をすることを体験して、自分が表現者になるとこんなに楽しいとか、芸術というのはやる経験をするとさらに見る時ももっと楽しくなれるということを経験してもらって、子どもたちを引率してもらえれば、一層深まるのではないかと。

○横山会長 引率の先生に目を向けられるのは面白い。コロナ禍で大学でもオープンキャ

ンパスに代えて高校の先生方を招いているが、お顔を見ると、興味を持って来ておられる方もあれば、別の印象を受ける方もおられることを思い出した。やはり学校教育のありようはこの審議会でも考えないといけないだろう。

○仲道委員 コロナ禍で様々なコンサートがなくなった時に感じたことは、音楽は、人と人との関わりにおいて成立するものだということである。コンサートの後に、他の人たちと感想を語り合ったり、体験を共有していると感じる時間が一番豊かな時間だと思った。お互いに語り合い認め合う、人と人とのかかわりが確認できるということが、文化がもたらすことの中で非常に大きなことであることをこのコロナを経て感じた。人の話を聞いたり、自分はそこにいていいということを認めてもらえる場があることが、心の健康、生きがいにもすごくつながると思う。静岡県の文化政策には、プラスアルファとして、文化を享受した後に、享受したことを他者と確認できる場づくりを積極的に行っていくということを入れるといいと思う。語りたい人も、積極的に表現できないタイプの人も参加しやすいようにして、一緒に過ごすことができる場を提供するのはどうか。コンサートや演劇の企画に加えて、静岡県ではそこにもう一つ、自由に参加して関わりを確認できる場を作ると面白いと思う。

○横山会長 講演やセミナーでも、その後に食事をしたり、もしくは1泊した後の朝食の時に、もう一度一緒に振り返って話し合えることが大切で、喜ばしいことである。この発言で、表現者という言葉は、幅が広がったと思う。

○柴田委員 基本目標に肉付けをしたことは良いと思うが、盛り込みすぎていないかという印象を受けた。この2行の基本目標には、人に重点を置いているということが漂ってきて、これは非常に良いことだと思う。また、文化によって相互理解を育むということも、伝わってきたので、この線は保ってほしい。

ただ、「風土づくり」とか、「心の健康長寿日本一」は、提示の仕方、目標の掲げ方が大きく捉えすぎている感じがある。また、1行目の冒頭と風土づくりはなかなか結び付きにくいのではないかと思った。併せて、「若者の感性が豊かに育ち」から心の健康長寿にまで行っているところに、盛り込みすぎた感じがある。

基本目標の考え方としては、静岡県の特性として広域性は外せないと思う。「誰もが表現者」というところに、誰もがいつでもどこでもという意味合いを加えると、県として広域性が増すのではないかと思う。政令指定都市以外の地域の支援は重要であり、書

きぶりとしては、静岡県セントラルの目線ではなくて、静岡県の様々な多様な地域で行われている文化活動の視点から、整えていただくとより良いのではないか。

「風土づくり」については、説明文が3行程度しかなく、練り込みが足りない。第5期の4年間の間に、果たして風土づくりまで到達するかというと、風土づくりの「基盤整備」ぐらいまでは行くかもしれないが、風土づくりまでは厳しいのではないか。

「若者が感性豊かに育ち、皆が文化に親しむ心の健康長寿」の説明文では「子どもたちが」で始まって、2行目には「若者が」となっている。若者の対象範囲が分からないので、子どもからいきなり若者に視点に移るといふところに違和感を感じた。また、若者を強調するあまり、高齢者とか中高年のような若者以外の対象を「皆」という言葉でひとくくりにしていいものかということもやや疑問である。

○横山会長 現代医学では50歳過ぎてからものすごくバラエティができるのが人間の身体であり、それ以前は世界中、実は単調で退屈するほど共通しているとされている。若者を育てるのだというとなんとなく安心する時代があったが、そうではなくて、いろいろな組み合わせを考え、いろいろな出会いをつくり、そこから何か生み出していく。そういう、綾をなす文化を考える時ではないかと思う。

○松井委員 表現という言葉は、結構難しいと思う。私も長年表現者をやっているつもりだが、難しくてなかなかできることではない。表現者の基本の姿勢は、ものを見ているだけではなくて、例えばゲームをもらえないとなったら自分でゲームを作るといった、自分で何かを作りたいという気持ちになっていくことが、とても大事なことだと思う。素晴らしい芸術を見て触発されるというのも大事なことだが、いつも受け身側だと、クリエイティブな人間が育つということにはなっていないと思う。例えば、ディズニーランドで遊んで楽しかった、だけでは、そこにはいろいろな表現があるけれども、自分がクリエイトすることではない。自分の中でディズニーランドを作っていこうみたいな、そういう姿勢が育たないといけないと思う。

計画案には、みんながとか、高齢者も子どもも若者もとなっているが、自分としては、子どもに焦点を絞っていけば、お母さん・お父さんという保護者がいて、おじいさん・おばあさんという高齢者は子どもに合わせてくれるというのもあるので、子どもに焦点を絞って表現者を育てていけば、子どもから波及して、若者・大人・高齢者へとどんどん広がっていくと思う。なので、焦点を子どもに絞ってやっていったらいいのではないか。

○森谷委員 風土が盛り込まれたことが、今までと大きく違うところかと思う。柴田委員からも指摘があったように、新しい項目なのに風土づくりの説明が4行しかなく、若干手薄感があるので、もう少し、歴史や文化、景観について盛り込んでもらいたい。

日本人と風土の関わり方そのものは、実はSDGsの先進的な取り組みであったので、伝統的な日本人のものと風土の関わり方、各市町村に残っている風土の守り方を大切に取り上げていけば、SDGsは自ずと達成できると思うし、こうした風土を守っていけば、必ず世界から人は集まってくると思う。

○澤田委員 基本計画の考え方を読んで、身近な文化をもう一度見つめ直すということと、体験するということが、あとは表現者という言葉が印象に残った。生活の中に多彩な文化と、あふれていることということについては、曖昧性を感じる。読み通すとローカルとグローバルの両方を意識したことを考えているようなので、多様な文化を認め、尊重して受け入れていくというような、多様な文化を認め合うような言葉の方が、今の時代の社会課題に対応しているのではないかな。

一つでも何かを自らやった経験は、他のいろいろなことにも通じるものを与えてくれるので、たくさんある施策をもう少し絞ってもいいかと思う。静岡県にはSPACがあるので、例えば、小中学生にSPACメソッドを体験してもらって、それをきちんと評価していく。悪い点、良い点を付ける評価ではなく、どこまで進んで、どこまで子どもたちが享受しているか、経験しているかというような指標を持ち評価するなど、焦点を絞った施策にすると分かりやすいのではないかな。静岡県として何に力を入れるということを明確にした方が、10年後、20年後に変化がわかりやすくなると思う。

身近な文化とは、既にあるものをどこかから持ってくるのではなく、今あるものをみんなでも再確認して価値を認識した上で、大事にしていくということがとても大事なことで、この文章に書いてあったことは良いと思う。

○太下委員 北川委員からも話があったが、具体的な中身、つまり施策を先に議論した方がいいのかなと思いながら聞いていた。基本目標というのはすごく大事な言葉だが、この基本目標に紐づく形で、実際にすることの集大成の言葉になるはずであり、それを議論しないで、一種の、空中での議論をしていても、なかなか短い言葉に集約するという議論がしづらいのではないかなと思った。

基本目標案は、「誰もが表現者」や「風土づくり」「心の健康長寿」と、他の県にあ

まりないような言葉がちりばめられていて、極めて意欲的である。意欲的な言葉であるが故に、解説が必要になり、意欲的な言葉であるが故に、いろいろ引っかかりどころもあって、こういう議論になっていると思う。次回には、その意欲的な中身に関する具体論をした上で、改めて抽象論と言うか、基本目標に立ち戻る方がいいのかなと思って聞いていた。

○遠山委員 私も基本計画・基本目標を見て、おっと思ったのが本音である。ここで言おうとしていることは、静岡県が第4期までにやってきたことを前提としての話なのだろうと思う。SPACの輝ける活躍や、文化プログラムといったハイカルチャーの部分に焦点が当たってきた。

第5期計画では、日常生活の中に多種多様な文化があって、認め合ったり、高め合おうということもあり、基本目標の中に二つのものが入り込んでいるのだと思う。一つは、ハイカルチャーをますます高くしていくことが大事で、それを明確にする。もう一つは静岡がいよいよハイカルチャーだけではなく、人々の日常生活レベルも各地域で、各年代層で、文化を楽しめるようにしようということなのかなと読み、これは一つ階段を上がったと思った。

「風土づくり」は相当な表現で、気風ぐらいまでは分かるけど、風土づくりまで行くのかなと思わなくもないが、そこまで大きく構えてやってみようという意欲は大変感じた。

そこで、一体何をやるのかというところを論理的に整理してみると、生活の中に多種多様な文化というのがあって、それを認め合うということについての説明の中に、ハイカルチャーの部分をもっと高くして、静岡の誇り高いものを輝かせる。その中に子どもたちも組み込んで、その後継者を育てていくという主張も入れていくのはどうか。

そしてもう一つ、日常レベルと言うか、富士山で言えば裾野の部分として、いろいろな種類のいろいろなことが各地で起きているものを、互いに認め合ったり、それを高め合ったりという部分。この二つをはっきり書き分けたいのではないかなと思う。

「誰もが表現者」というのは難しいと思うが、書くとすれば、誰もがの中でも、私は高齢者の問題をはっきり取り上げたら静岡らしいと思う。現状分析に高齢化・少子化があり、これは全国的な勢いだが、静岡はますますそれがはっきりしてきている。

静岡県が作った「ふじのくに型人生区分」では、65歳以上を高齢者というのではなく、76歳までは壮年とし、社会の中核部分の青年・壮年が73%と、世の中を動かしていく人たちの割合をたくさん見ている。この年齢層の文化活動への関心を高めることを重要で

ある。また、その区分は使わないにしても、通常定義における老年でも、文化的なものを作り上げたり、伝承された技術やお祭りを伝える活力ある高齢者もいることから、「誰もが表現者」の所に年齢層に応じた位置付けがいては。その中でも高齢者の役割をきちんと掲げることで、静岡に来ると高齢者も非常にいい表情で生き生きと生きられるということが分かるのではないかと。私は高齢者という呼び方より、年配者の方が良いと思う。

ハイカルチャーの人たちはますます高く、日常的な生活レベルの人たちも文化を享受できる豊かな県であるために、ふじのくには「文化のくに」と、一言で言えばそういうふうな県として発展していくのだということを確認していくということが上位概念としてあって、その下で基本目標があり具体施策があるというふうに論理的に整理してみたらどうか。

○横山会長 あるコミュニティが平和であることの要に、その人がいるだけで周りが違っていくという、社会における老年者の関わりを思いながら聞いた。

続いて、論点2について御発言願いたい。

○北川委員 抽象的であり、こういうことをやりたいのだということが見えてこない。静岡はいろいろな意味ですごく可能性が多いが、このままでは具体的に何も進歩しないと思う。SPACとアーツカウンシル以外は平均的に述べているに過ぎず、エンジンにならない。それでは無駄なことだし、何か新しい動きが出た時に抑圧に向かう恐れがある。

○太下委員 北川委員から問題提起されたことはその通りである。施策こそが大事であり、ここでこれから4年間の静岡の文化振興を決めていくことになる。24ページにわたって施策以外の説明をしているが、施策に関してはこの25ページからこれまで以上のボリューム感を持って、具体的に何をするかを書くべきであり、それこそがこの計画の意味である。

食文化の推進については、重要なことである。文化芸術基本法の中に食文化という3文字が具体的に書かれ、昨年度文化庁にも食文化推進の部署ができたように、国として食文化の推進を始めるというところにある中、極めて食文化の豊かな静岡県はどのようにするかという時に、例えば食文化ミュージアムがあってもいい。また箱物かと思われるかもしれないが、これは最終的にミュージアムという箱物になればいいという提案であって、ミュージアムを作るためには資料収集・調査研究が非常に大事で、その成果を発表

していく場も大事である。コロナの影響で、成果発表の場は、今デジタルの世界に移りつつある。

例えばアメリカのスミソニアンミュージアムは年間 3,000 万人以上来る巨大ミュージアム群だが、これからの基本目標を、年間 10 億人の人にリーチすると転換した。来館者ではなくデジタルで情報発信できるかという発想であり、それを考えると、この食文化ミュージアムを静岡県が作る時も、最初にやるべきことは調査研究と、その成果発表のデジタル化である。これならそれほどお金は掛からない。しかも、静岡県の食のブランディング化に大きく寄与し、観光振興にもおそらくつながる。そういうことをこの施策の中に具体的に書き込んでいけば、25 ページでは足りないだろうし、夢のあるプランにすることもできると思う。

○横山会長 今の案では、演劇の都も 1 行書いてあるだけだが、宮城委員からはどうか。

○宮城委員 演劇とは、様々な要素が集まっている大きなお皿みたいなものである。率直に申し上げて、この何十年間で子どもたちの環境で多様性ってどんどん減っていると思う。そういう意味で、演劇は多様性を実感できる。人は自分と違うんだとか、こんなにいろいろな人がいるんだ、ということを実感してもらえる場所として、いろいろな役に立つのではないかということは思っていて、活用してもらいたい。

一方で、いろいろなジャンルがあるということも大事である。演劇以外のジャンルに興味があるという人もたくさんいて、具体的に絞り切れないことが、何をやるかが分からないという北川委員が話すような感じにつながるのではないか。

いろいろあるということはとても大事なことで、芸術と思っているもの以外にも、いろいろ身近にあり、どこからでも入れ、いくつになっても入れるというそのアピールはとても大事だと思う。これと、具体的にこういうことをやるという何らかに絞る方向をどうやって両立させるのかが非常に困難なところだと思う。

○鈴木委員 コロナの 1 年間、SPAC が劇場でできなかった間にも、演劇アカデミーなどいろいろなことをよく考えられ、演劇の都づくりに向けていよいよ土壌ができつつある。音楽、演劇、食文化といったことを施策に盛り込む中で、先ほども人との関わりという話があったが、コンサートや演劇を見てからの語らいの中に食文化を入れる。それぞれを一緒にして、大きな意味でのふじのくに芸術の都という構想をこれから広げてほしい。

それぞれをつなげることによって、他県から、そして海外からもつながりができると

いうことで、これを本当に大きな第1歩になるという思いを込めて、第5期の施策展開に大きく取り上げてほしい。

○横山会長 都という言葉に注目しての発言を聞かせていただいた。具体的な展開については今ここではなくとも、考えておく必要がある。

○鈴木委員 あと、拠点としてアーツカウンシルがあるということに私はつなげたいと思う。まとめるところがないと発展しないという意味では、このアーツカウンシルができたことが本当に大きな意味があり、これをいかに活用していくかがこれから大事になると思う。アーツカウンシルを活用するところにすべて結び付けてやっていただきたい。

○森谷委員 舞台芸術公園は、いつもきれいに整備されているが、もったいないと思っている。公園という名前が付いているが、公園らしい機能がほとんどない。例えばカチカチ山の素晴らしいカフェを一般の人に公開されるともっと人も来やすくなるのではないか。それから、例えば幼稚園や小中校の演劇の発表会等の会場として使ってもらうとか。あるいは公園に立ち寄った人たちが声の出し方を教えてもらえとか、朗読を教えてもらえとか、あるいは朗読が聞けるとか、そういったことができる、もっと公園として根付いていくのではないか。

もう一つ、アーツカウンシルに関連して、歴史的なもの、文化、お祭りとかそういうものは衰退の一途で、去年も南伊豆の方で、指導者がいないという話もあって、和太鼓の演奏が最後となった。何か応援して欲しい、それから知恵が欲しい、お金も欲しいということを地域の人から聞くが、アーツカウンシルに相談しても、イベントとして成立していることや、動画配信やワークショップ開催などより多くの人に関わることが条件になってくると、地域の人たちもお手上げになる。今まで何百年と続いてきたものを続けるということに重きを置いて、歴史文化関連のマップやイベントお祭り等の一覧表を作成したり、アドバイスを受けられるだけでもいいので、アーツカウンシルで後ろ盾になってもらえるとありがたい。その時にアドバイザーから、例えばお祭りだけじゃなくて、お祭りの背景になっている景観や自然の風物の保全に対するアドバイスなどもらえたら、風土も同時に守っていけると思う。時には県の他の部署とも連携してやってもらいたい。

○遠山委員 縦軸としての歴史の軸と、横軸として各地の特色のある文化をどう育ててい

くかという視点で捉えてもらいたい。例えば、単に文化財が一つあるのではなく、その文化財が脈々とした歴史の中で生まれ、これをどう守っていくのかということを考えてほしい。日本平や西伊豆、富士山山麓、浜松とそれぞれ違う特色を広い視野で捉え、各地域の文化ゾーンを作っていく。その文化ゾーンは、歴史、伝統、民芸、祭、名産品など各々が持つ特色を明確にして、文化ゾーンの魅力をはっきりさせる。その時に、例えば文化マイスターといった形で高齢者や壮年層に手を挙げてもらって、この地域はこういう形で進めたいとなったら、アーツカウンシルが話に乗ってくれるような、ダイナミックな動きをしていくというのが、一つ施策にならないか。

○横山会長 大変具体的な指摘であった。アーツカウンシルよりも文化カウンシルの方が言葉として適切かもしれない。

○木下委員 県立美術館がどこに位置付くのだろうと考えたとき、例えば重点施策1の「世界に輝く静岡ブランドの創造」に、美術館が35年間掛けて築いてきたコレクションもまた位置付くのではないか。先ほど遠山委員から、ハイカルチャーをもっと高くとの発言があったが、先の狩野派の展覧会も、美術館のコレクションを基盤にしたものであった。発信力はまだ弱いかもしれないが、ある文化的な営みの中で蓄積されたものが、既に一つの財産としてあることを考えると、十分にこれを活用していく方向を考えるべきだと思う。今のところは、これまでにやってきた施策を並べた段階でとどまっていると思うが、どこに重点的に力を注ぐのかを考えていくべきである。

それから、従来、美術館と劇場は違うと考えられてきたと思うが、美術館で体験できる様々な造形表現は、作家の身体から生み出されたものだと考えれば、昨年来のコロナ禍によって我々は距離を保つことを余儀なくされ、身体性の回復が求められている時に、そういう観点からも、「演劇の都」において多種多様な表現活動が展開するという考え方を築くべきである。

演劇の都の説明で、様々なパフォーマンスアーツが並んでいながら、最終的に舞台芸術というくくりでとどまっていたと思うが、多分劇場も舞台には収まらないように、美術館も展示室では収まらない。これからの4年間、これをどういうビジョンによって、既存の施設をどう変えていくのかも重要である。

それからもう一つ、第4期期間中に新たに登場してきたこととして、障害者の問題がある。障害者と共に生きていくという観点から、健常・障害という言葉自体を見直していかなければいけないという状況の中で、誰もが表現者の「誰もが」に当然障害者も入

ってくる。誰もが表現者というこの理念を打ち出していくのであれば、誰もがというところも考えなければいけない。芸術文化表現だけに限らず、誰かに対して言葉を発するというのも表現である。そのぐらい大きな捉え方で考えていってはどうか。

語るということに対して聞くということも大切だ。人の話に耳を傾けるというシンプルな行為も、それは多様な文化を認め合うことなのだろうと思う。これから中身を一緒に詰めていきたいと思っている。

ところで、県として、第1期から第5期まで貫かれているものはあるのだろうか。それから、第4期計画の文化を支える、文化が支えるという言葉には何が込められているのか教えていただきたい。

○**スポーツ・文化観光部長代理** 平成18年に策定した文化振興基本条例の基本的な考え方の中に、見る、つくる、支えるというキャッチフレーズがある。文化は、創造する人と享受する人だけで完結する世界ではなく、文化を支えていくという働きが重要だという認識がその時にあって、条例の中にも文言として盛り込まれた。なので、文化振興基本計画も最初の頃から見る、つくる、支えるという三つの項目がベースになっている。

その支えるという本県の特徴的な取組みが、今回アーツカウンシルという形で、支えるための拠点的な組織ができたというのが第4期を貫く一つの成果である。私たちが最初に構想していた、見る、つくる、支えるの支えるの部分が第4期である程度形になり、第5期ではその次のステップに行きたいという気持ちがやや抽象的な言葉となっているが、それを整えて次のステージに行きたいというのが今の考え方である。

○**太下委員** 第4期の基本目標は「感性豊かな地域社会の形成」とすごく簡潔である。基盤ができて次に行こうというのが第5期で、誰もが表現者という文言が目標に選ばれたという展開は、社会の形成という中での役割をこれから果たしていくアーツカウンシルというのができたという意味でも、いいと思う。

一方で、文化を支える、文化が支えるという言葉は、文化が人間の生活に不可欠と言うことを全般的に示している非常にいい言葉だと思っていて、使い続けていくといいと個人的には思う。

○**澤田委員** 重点施策は、施策内容はこんなに多くなくても、三つ四つ、多くて五つぐらいでもいいので、そこで具体的にどういうことをやるのかということが書いてあると、とても納得性が高まると思う。それぐらいの数に絞って具体的に書けば、自ずと他の施

策とそれぞれ関わってくると思うので、どういうことを県がやろうとしているかということが確認できるようになると思う。

○柴田委員 静岡県は広く、人口も多いので、施策をまとめる時は非常に難しい。県レベルでの文化政策を推進していくと、全方位外交になりがちのところがあるが、施策を絞り込んでいくことは非常に重要である。その時には、現状把握と需要予測、それから将来どういうふうに文化芸術が発展していくのかという、その将来予測も含めて考えて進めてほしい。

施策の指標については、案ではアウトプットにとどまっているが、これから重要なのは、変化率（アウトカム）だと思う。集客できた鑑賞者がどのように変化をして、地域コミュニティにどのような影響を及ぼしていくのか、アウトカムベースでの指標も作っていただきたい。SPAC が世界で輝くという目標に対して、鑑賞者数だけでは心許ない。SPAC がどのように成長して行くのかとか、SPAC がコミュニティに対してどのような影響を与えたのか、その変化率を指標として作ってほしい。

○横山会長 ふじのくに子ども芸術大学も、参加した子どもたちがその後どうなったかというデータをこれから揃えていきたいというのが現状であり、重要なご指摘である。

○松井委員 具体的に絞り込むのが難しいのであれば、文化は基本的には歴史を見てから作り上げていくことだと思うので、結局その地域地域の文化をもう1回、地域に根付いた歴史から掘り下げていったらどうだろうか。そういった歴史があることで高齢者の食いつきもよく、地域で賛同も得られると思う。なので、縦に深くその地域地域の歴史をもう一度見直して、カテゴリーごとにリストアップし、リサーチをしていく。それから新しく絞っていくと絞りやすくなっていくと思う。サブカルであれば、プラモデルがすごいとか、いろいろたくさん出ていると思う。絞るきっかけをいろいろ歴史から追い込んでいくようにしたらいいのではないか。

○仲道委員 柴田委員と同感で、評価指標が鑑賞者数になることには常々疑問を持っていた。変化率では、何に向かってどう変化してほしいのかという目的を考えなければならないが、それが明確になることで、どのように施策を書き、何を目指すのかということがより明確になると思う。

○**太下委員** 成果指標については柴田委員、仲道委員に加え、欠席された高山委員からも意見が出ているが、私も鑑賞者数という成果指標はやめるべきタイミングだと思う。国立美術館はこの4月から新しい中期計画に入ったが、その前は、入館者数が第一の目標に掲げられていた。目標を入館者数としていることに、以前から疑問を投げかけていたが、このコロナ禍でそもそも物理的に入館者数という目標に意味があるのかということで見直して、入館者数という目標を無くした経緯がある。数ではない目標を立てるのは難しいが、静岡県でも、例えば来館者の満足度、小中学生の静岡の文化に対する愛着度などの新たな指標を考えていただきたい。

(閉会)

○**事務局** 長時間にわたり貴重なご意見をいただき、お礼申し上げます。ご意見を踏まえて事務局で計画策定を進め、施策の具体的内容を含めた案を作成し、次回10月頃開催予定の審議会に諮る予定である。以上をもって本日の審議会を終了する。